

改訂・沖縄県の 絶滅のおそれのある 野生生物 第3版

菌類編・植物編

レッドデータおきなわ



Threatened Wildlife in Okinawa, Third Edition (Fungi and Plants)
— Red Data Okinawa —



沖 縄 県

改訂・沖縄県の
絶滅のおそれのある
野生生物 第3版

菌類編・植物編

レッドデータおきなわ

Threatened Wildlife in Okinawa, Third Edition (Fungi and Plants)
- Red Data Okinawa -



沖縄県

発刊にあたって



沖縄県は、亜熱帯海洋性気候の下、美しいサンゴ礁が発達した青い海と多様な野生生物が生息・生育する緑豊かな160の島々から構成されており、他の都道府県とは異なる固有の自然環境を有しています。

この恵み豊かな自然環境を保全し、次世代へ引き継ぐことは、今を生きる私たちに課せられた責務であります。

現在、環境省において、西表石垣国立公園の拡張や、やんばる国立公園の指定と併せ、同地域の世界自然遺産登録に向けた作業を進めており、平成30年夏頃に開催される世界遺産委員会において、登録の可否が決定する見込みです。

一方、沖縄県の自然環境については、以前から、外来生物が生態系にとって脅威となっていたほか、開発等による希少種の絶滅などが懸念されていたことから、これらの保護の必要性を広く県民に知らせることを目的として、平成8年に「沖縄県版レッドデータブック」を策定し、平成17年に第1回目の改訂を行ったところであります。

今回の改訂は、環境省のレッドリスト第4次改訂（平成24年）や、IUCN（国際自然保護連合）レッドリストの改訂（平成29年）など、国内外における近年の動向を踏まえつつ、分子系統学に基づく分類の整理や現地調査の結果など、最新の知見に基づき対象種の選定及びランク付けを行い、これまでの菌類100種を85種に、植物846種を938種にリストアップいたしました。

今後も、沖縄県の自然環境を県民の宝、そして国民の宝として受け継いでいくために、本誌が、国内外の多くの皆様に情報提供を行うものとなり、沖縄県の野生生物を保護し、生物多様性を保全する一助となれば幸甚に存じます。

最後に、本誌の作成に当たっては、沖縄県の野生生物に対して専門的な知見を有する多くの関係者の皆様に慎重な検討と評価を行っていただきました。この場を借りて心から感謝申し上げます。

平成30年 3月

沖縄県知事 翁長 雄志



沖縄島北部やんばるの溪流環境

沖縄県の絶滅のおそれのある 野生生物(菌類・植物)

亜熱帯気候かつ160もの島々からなる沖縄県の野生生物(菌類・植物)は、沖縄島北部にのみ分布するオリヅルスミレやオキナワヤスデゴケ、西表島固有のハエヤドリトガリツブタケ、モノドラカンアオイ、魚釣島にのみ分布するセンカクオトギリのように、それぞれの島で独自に進化した固有種(固有変種)や分布域の南限であるウバメガシ、また北限のヤエヤマシタン、地史的に興味深い分布を示すウラジロガシなど、きわめて多様な種が知られています。こうした特長を持つ本県の植物は、本来、生育範囲が小さい種や生育数が極めて少ない種も多く、開発や過度の採取により絶滅の危険性が高まっています。

ここでは、本改訂において、沖縄県で絶滅または絶滅のおそれのある種として選定された野生生物(菌類、植物)の概要を示します。

宮古諸島 144種

(うち絶滅3種)

維管束植物 ミヤコジマハナワラビなど 89種

(うち絶滅3種*)

蕨類 イボエシノブゴケ 1種

藻類 インドオオイシソウなど 54種

* 本改訂では新たな絶滅種はありません。前回改訂(2006)までに、ソロハギ、トチカガミ、トラノシダの3種が絶滅種に選定されています。



ミヤココケリンドウ



ミヤコジマハナワラビ



ミナミクロカワモスク



イトシャジクモ

尖閣諸島 43種

維管束植物 センカクオトギリなど 39種

藻類 ヒメカラゴロモなど 4種



センカクオトギリ



硫黄鳥島の諸島区分は、沖縄県史各論編、第1巻自然環境(2015)における自然科学的視点の区分けに準じました。そのため、本県では硫黄鳥島のみ出現する維管束植物3種(マルバニッケイ、カキラン、フユノハナワラビ)は本図の各諸島別集計には加えていません。疑問とされる分布域は除外しています。

沖縄諸島 681種

(うち絶滅8種 野生絶滅3種)

菌類 テングタケなど 38種

維管束 オキナワセッコクなど 472種

植物 (うち絶滅8種 野生絶滅3種*)

蘚苔類 フチドリコゴケなど 50種

藻類 オキチモズクなど 121種

* 本改訂では新たな絶滅種はありません。前回改訂(2006)までに、ジュンサイ、ソロハギ、ヒメミクリ、ゼンマイ、ヒメウラジロ、トラノオシダ、ウスバシダモドキ、クリハランの8種が絶滅種に、オリヅルスミレ、リュウキュウアセビ、クメジマツツジの3種が野生絶滅種にそれぞれ選定されています。



テングタケ



アラゲウスベニコップタケ



タチミゾカシ



ヒメキセワタ



オキナワテンナンショウ



オキナワセッコク



フガゴケ



オキチモズク



ヤバネモク

硫黄島、

伊平屋島

沖縄諸島

伊是名島

伊江島

粟国島

渡名喜島

座間味島

沖縄島

渡嘉敷島

八重山諸島 621種

(うち絶滅2種)

菌類 キアミズキンタケなど 44種

維管束 イリオモテランなど 433種

植物 (うち絶滅2種*)

蘚苔類 エビスゴケなど 64種

藻類 ヤエヤマカワモズクなど 80種

* 本改訂では新たな絶滅種はありません。前回改訂(2006)までに、ソロハギ、ジンヤクランの2種が絶滅種に選定されています。



イリオモテセミタケ



ヒメツルアダン



マツムラソウ



タイワンエビネ



イリオモテウロコゼニゴケ



チャイロカワモズク

北大東島

南大東島

大東諸島

沖大東島

大東諸島 40種

維管束 ヒメタニワタリなど 38種

植物

藻類 ハダシシャジクモなど 2種



ヒメタニワタリ



ダイトウワダン

沖縄県の自然環境(陸域～沿岸域)

野生生物はさまざまな自然環境に適応してすみわけて生活しています。森林には多くの野生生物が生息・生育していますが、多くの島嶼からなる本県では沖縄島や宮古島、石垣島、西表島など地域によっても森林を形づくる植生環境やすんでいる野生生物が異なるなどの特徴が見られます。

また、山・川・海はそれぞれ密接につながり、川と海を行き来する両側回遊性の生物が多いことも本県の特徴の一つとなっています。河川を通して運ばれた陸域の栄養分は、河口や干潟、沿岸域の自然環境が形成されるために必要なものであり、多様な生物からなる生態系をささえています。

陸 水【河川・沢・湿地・湧水】

本県の河川の多くは延長がみじかく急勾配となっている。沖縄島北部や石垣島、西表島などの自然度の高い河川や沢では、オキナワイシカワガエルやヨシノボリ類、サワガニ類、植物ではクニガミトンボソウ、カワモズク類などこうした環境を好む多くの生物の生息・生育場所となっている。一方、沖縄島中南部では、人工的な河川が多いものの、自然が残っている地域では、ミナミメダカや台湾キンギョなどが生息している。本県の湿地には、キクザトサワヘビが生息する久米島の溪流・湿地、シギ・チドリ類などの生息地である沖縄島南部や石垣島の湿地・干潟などがあり、その一部はラムサール条約登録されているほか、伊平屋島、池間島、与那国島など各地にも湿地環境が見られ、水鳥をはじめヒメフチトリゲンゴロウ、タヌキアヤメなどの生息・生育地となっている。このほか、沖縄島中南部や宮古島、大東諸島など石灰岩地には洞窟や地下水系の発達が見られ、ウリガーテナガエビなど特有の生物が見られるほか、一部は崖や海岸などで湧出しミヤコサワガニや藻類などの水生生物の生息・生育の場ともなっている。



河川・沢



湿地



湧水



地下水

自然環境の区分は「沖縄県自然環境再生指針」平成27年3月、沖縄県より引用、一部改変
※背景写真は沖縄島北部やんばる地域の森林を撮影

陸 域【森林】

沖縄島北部のやんばる地域や石垣島、西表島の山地の森林には、河川などによる浸食地形が発達し、イタジイ（スダジイ）などの亜熱帯性照葉樹林が広がっており、多様で固有性の高い生態系を形成し多くの野生生物の生育・生息地となっている。高標高地では一部に雲霧林の状態が見られるほか、河川や沢沿いなどの湿潤な場所ではランやシダなどの着生植物や蘚苔類も多く見られる。海岸低地にはアダンやオオハマボウなどが生育するほか、低地から内陸まで広い範囲にアカメガシワ、イジュ、リュウキュウマツなどからなる代償植生が分布する。沖縄島中南部地域や宮古地域においては、昔から農地化や宅地化が進んだことから、主として石灰岩丘陵や石灰岩堤・崖などに森林が残っており、ガジュマル、リュウキュウガキなどの石灰岩地に特有の植生環境が見られる。



沖縄島北部の山地森林



八重山諸島の山地森林



湿潤な森林にみられる着生植物



ガジュマルが生育する石灰岩地の森林

河口・沿岸域【干潟・マングローブ・藻場・サンゴ礁】

砂浜や岩礁、干潟、そして沖合のサンゴ礁に至る環境であり、河川により陸域と繋がっている。河口には、熱帯や亜熱帯に特徴的なマングローブが発達しており、西表島のニッパヤシ、沖縄島のヒルギモドキなど北限種の多いことが特徴である。河口や沿岸に広がる干潟には、多くの渡り鳥がみられるほか、貝類や甲殻類などきわめて多様な底生生物のすみかとなっており重要である。沿岸域は黒潮のため温暖で各地にサンゴ礁の発達が見られる。本県では約 400 種の造礁サンゴが確認されているほか、宮古諸島の八重干瀬や八重山諸島の石西礁湖などでは大規模な離礁も見られる。サンゴ礁は魚類など多くのすみかとなるほか、外洋の高波を和らげる役割もあり、その内側にあるアマモ場などの藻場は幼魚のすみかとなり生態系に重要な役割を果たしている。



干潟



マングローブ



藻場



サンゴ礁

「沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（菌類編・植物編）、レッドデータおきなわ」の改訂にあたって

沖縄県は東西 1,000 km（北大東島～与那国島）、南北 400 km（硫黄島～波照間島）の範囲に孤状に点在する 160 余りの島々からなる。沖縄県は面積的には日本全体の 1% に満たないが、亜熱帯海洋性気候・地史・地形・地質・地理的位置など植物相に影響する諸条件が地域ごとに大きく異なるため、多様性・固有性・遺存性の高い植物相を持つことで知られている。

このように特色ある豊富な植物相を持つ沖縄県であるが、近年野生植物の多くの種は絶滅の危機に瀕しており、開発が進んでいる沖縄島や久米島では、既に絶滅した植物種が相当数認められる。小さな島々からなる沖縄県は、わずかな面積の開発でも個々の植物種に深刻な悪影響を与えることが多い。狭い地域で生物多様性が高いと言うことは、個々の種の個体数や生育地の数が少ないことと表裏一体の関係にある。生物多様性を維持しながら、自然と人間が共存してゆくための一助として、本書が作成された。

本書の初版は 1997 年に発行された。改訂版は 2006 年に発行され、環境省版の絶滅危惧種のカテゴリー区分と判定基準を導入した。今回の改訂が 3 版になる。今もなお続々と発見される新種や新記録種を収録しながら、個々の種のランクの見直しを行った。カテゴリー判定により客観性を持たせるため、多くの調査協力者の協力を得ながら数値基準の採用を試みたが、十分には取り入れることができなかった。次回の改訂の重要な課題である。本書は沖縄県全体を対象としているため、地域間での希少性の違いを考慮に入れたランク指定が十分に配慮されているとは言えない。よりきめ細やかな保全対策を策定するためには、島嶼単位あるいは市町村単位のレッドデータブックを作成することも必要だろう。

改訂版から今回の 3 版発行までの間に、本県ではやんばる国立公園と慶良間諸島国立公園が新設され、西表石垣国立公園や沖縄海岸国定公園が拡充されるなど、野生生物の生育地の保全がある程度保証されることになった。沖縄県の一部の島嶼は、その貴重な生物多様性と生態系が評価され、世界自然遺産の候補地にもなっている。候補地以外の島々を含めて、島々の自然環境と生物多様性のより一層の保全が求められている。本書が効果的な自然保護対策に少しでも役立てば幸いである。

沖縄県版レッドデータブック編集委員会 横田 昌嗣（琉球大学理学部教授）

改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版（菌類編・植物編）

目 次

発刊にあたって	
沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（菌類・植物）	1
沖縄県の自然環境（陸域～沿岸域）	3
掲載種図版	5
「沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（菌類編・植物編）、レッドデータおきなわ」の改訂にあたって	54
1. 沖縄県の自然とレッドデータブック	
1. 1 沖縄県の自然環境について	55
(1) あらまし	55
(2) 沖縄県における野生動植物とその現状	55
1. 2 改訂・沖縄県版レッドデータブック 第3版について	57
(1) 背景	57
(2) 本県レッドデータブック改訂の目的	58
(3) 改訂第3版の作成基本方針	58
(4) 沖縄県版レッドデータブックの意義	58
(5) 改訂・沖縄県版レッドデータブック第3版 作成体制	59
(6) 沖縄県版レッドデータブックの構成内容	60
(7) 改訂第3版のカテゴリー	60
(8) 今後の課題	66
2. 選定方法	
2. 1 はじめに	67
2. 2 評価対象範囲の設定	67
2. 3 掲載種の選定手順	68
2. 4 菌類編・植物編の作成にあたり	68
3. 選定結果	
3. 1 掲載種数	72
3. 2 掲載種リスト	74
3. 3 菌類	91
3. 4 維管束植物	139
3. 5 蘚苔類	527
3. 6 藻類	568
4. 初版－改訂第3版・カテゴリー対照表	668
5. 本書の作成に協力いただいた方々	689
6. 掲載種索引	691

RED DATA OKINAWA

